

‘see/believe N to V’ の V の性質

葛 西 清 蔵

0. はじめに

「知覚動詞」see は、能動態では to なし不定詞をとり、受動態では、to 不定詞をとる、という従来の説明が不正確であることについては、葛西（2000）で論じた。つまり、

1. a They saw her *go*.
- b She was seen *to go*.

「彼らは彼女がでかけるのを見た」という意味の（1 a）の受動態とされている（1 b）は、「彼女がでかけたこと／のが知られた（わかった）」という、（1 a）とはべつの意味の文であり、（1 a）と（1 b）は書きかえの関係にはないことをのべた。

このように see は to 不定詞も、to なし不定詞もとることができるが、つぎの文でみるように、あとにくる動詞によって許容度がちがってくる。

2. a *They saw Mary *live* in town.
- b They saw Mary *move* into town. (Felser 1998 : 39)
- c They saw her *to be* the one.
- d *They saw her *to represent* the tradition. (Bolinger 1975 : 399)

(2 a, b)、(2 c, d) の対比でも、すでに明らかなように、to なし不定詞、to 不定詞いずれについても、動詞の種類によって許容されたり、されなかったりする。本稿では、このことを糸口にして、表題の構造の動詞 (V) の性質について検討する。

1. see のさまざまなふるまい

1.1 ここでは、to なし不定詞、to 不定詞をとる see のふるまいをくわしく見ていくことにする。

- 3. a *We saw him *have drawn* a circle.
- b *We saw him *be drawing* a circle. (Felser 1998 : 356)
- c *We saw him *own* a car. (太田 1980 : 501)
- d I saw her *to be* friends with everyone.
- e *I saw her *to make* friends with everyone. (Bolinger 1974 : 70)
- f I see them *to have arrived*. (Bolinger 1974 : 77)
- g ?We saw John *to be leaving* (soon). (Felser 1999 : 38)

ここでは see について、さらに新しいふるまいが見られる。to なし不定詞をとる (3 a, b) では、see は、「完了形」、「進行形」をとらない、つまり、「相」にかかわるものをさけることが知られる。ところが、to 不定詞をとる (3 f, (g)) では、「完了形」・「進行形」が許容されている。

1.2 さらに to なし不定詞をとる see の類例のふるまいを見ていく。

- 4. Mary saw the princess (a) *kiss*/kissing the frog.
- (b) **have*/* *having kissed* the frog.
- (c) **be kissing* the frog.

(d) ?be/being kissed by the frog.

Lapointe (1980 : 785)

ここでは、すべて to なし不定詞で、to 不定詞は対象になっていないが、「完了形」(4 b)、「進行形」(4 c) が許容されない。許容される(4 a)、(やや許容度がおちる(4 d))について、Lapointe (1980 : 785) は、「行為」(action)、「過程」(process) だとのべており、許容されない(4 b, c) については、これらは「状態」(state) をあらわすという。これは、上でみたことの確認になる。さらに、「完了形」、「進行形」が「状態」をあらわす、としていることに注目しておく。

2. see のふるまいのまとめ

2.1 to 不定詞、to なし不定詞の場合の比較

これまでにみた see のふるまいを整理するとつぎのようになるであろう。to 不定詞をとる場合、to なし不定詞の場合を区別して見る。(許容される場合を ok、されない場合を out とする。() のなかは、該当する例文である。)

5. a to なし不定詞をとる場合

非状態動詞	状態動詞	完了形	進行形
ok	out	out	out
(4 a)	(2 a)	(3 a, 4 b)	(3 b, 4 c)

(「できごと」をあらわす「動態動詞」(dynamic verb)、「動作」をあらわす「動作動詞」(action verb) をあわせて「非状態動詞」(non-stative verb) とよぶことにする。)

b to 不定詞をとる場合

非状態動詞	状態動詞	完了形	進行形
out	ok	ok	ok
(2 d, 3 e)	(2 c, 3 d)	(3 f)	(3 (g))

(5 a)、(5 b) からつぎのことがわかる。

6. ① to なし不定詞をとる「直接知覚」の場合は「非状態動詞」をとるが、to 不定詞をとる「間接・精神的知覚」の場合は「状態動詞」をとる。
 ② to なし不定詞の場合は、完了形、進行形の「相」を許容しないが、to 不定詞の場合は完了形、進行形の「相」を許容する。
 ③ to なし不定詞をとる場合と to なし不定詞をとる場合のふるまいは、完全な「相補関係」にある。

2.2 つぎは(6)でみたまとめの理由を検討することにする。

2.2.1 まず、つぎの文をみよう。

7. a I saw John *cross* the bridge.
 b I saw John *crossing* the bridge.

一般に、この文の *cross*、*crossing* の意味のちがいについて、to なし不定詞では、「はじめからおわりまで」見られる「できごと」、「行為」(complete events/actions which are seen from beginning to end) (Swan 1995 : 284) と説明される。

Kirsner (1977 : 172) が、to なし不定詞について、これは、はじめとおわりをもち、時間にしばられている (bounded in time) が、「変化」(change) の

解釈をこのみ、そのため、「行為」(action)の可能性をおこさせる」(raises, at very least, the possibility of action) といっていることと符合する。

これをふまえ、つぎの例をみてみよう。

8. a *They saw Mary *live* in town. (=1a)

b They saw Mary *move* into town. (=1b)

(8 b) の文において、Mary が町に移っていく (move) という「行為」を、はじめからおわりまでみることはできるが、(8 a) で住んで (live) いる「状態」を、はじめからおわりまで見ることは事実上不可能である。

9. a *We saw John *have* a car.

b *We saw Mary *be* tall.

この文から Felser (1998 : 361) は、to なし不定詞をとる see には「状態述語は除外される」という。

一見「状態」的なつぎの例、

9. c ?We saw John *own* a car (for a five minutes once).⁽¹⁾

d We saw John *stand* on the table.

(vs. ?We saw a lamp *stand* on the table.)

(9 c, d) から「一時的な状態」(a transient state) のものであれば「ときには可能」(Felser 1998 : 362) としており、状態に変化があるものでなければならぬことを指摘する。⁽²⁾

また、このことについて、Bolinger (1974 : 67-68) は、

10. a I saw them *be* obnoxious.
 b I felt him *possess* me body and soul.

これら *be*, *possess* という状態とおもわれる動詞の文を許容しているが、これらの文には、それぞれ (I beheld their acts.)、(I perceived the event.) という文がそえられており、いずれも「行為」(acts)、「できごと」(the event) をあらわしているとしている。また、Bolinger (1975: 89) では I saw him *be* rude. を許容しているが、この *be* は *act* という意味の「非状態動詞」であることをのべている。

see は *to* なし不定詞をとるときには「動き」のある「行為」・「できごと」をあらわす「非状態動詞」がふさわしい。

2.2.2 *see* があとに *to* なし不定詞をとる場合は、自分の感覚器官での「同時的」な「直接知覚」であるが、このことからすると、* I saw Mary *have left*. のように「完了形」をとることはできないのは当然である。すでにすぎたことを、いま知覚することはできないからである。

逆に、*to* 不定詞をとる I saw Mary *to have left*. では「M. がでかけたこと」を間接的に「知る」となって、まったく問題はない。すでにおこったことは直接、同時に知覚はできないが、そのできごとが、結果として、ある状態になる (reduced to a state) (Riddle 1975: 468) と認識の対象となることはできるのである。動きのある「できごと」・「行為」は、直接的・同時的に知覚できるが、状態は感覚では知覚しにくい (a state not perceptible to senses) (Mittwoch 1990: 111) のである。*see* が *to* 不定詞をとる場合、「状態動詞」(「完了形」、「進行形」) をとる、というのはこのことであるはずである。

3. *see* と「思考動詞」*believe* との比較

3.1 すでに *see* について見たことを、*see* とおなじ「私的動詞」(private verb)

である believe のふるまいについて見てみたい。

11. a *I believe him *to die*.
 b I believe him *to be dying*.
 c I believe him *to have died*.
12. a *I believe him *to work* very hard.
 b I believe him *to be working* very hard.
 b' I believe him *to be* the one.
 c I believe him *to have worked* very hard.

Stockwell et al. (1973 : 570)

13. a I didn't believe John *to be dying*.
 b *I didn't believe John *to die*. Hudson. (1970 : 209)
14. a ?We believe John *to be* hungry.
 b ??We believe John *to avoid* work. Wasow (1977 : 127)

3.2 ここで believe のふるまいについて、(5)とおなじ要領でまとめてみよう。

believe は、to なし不定詞をとることはない (Bolinger 1974 : 66) ので、to 不定詞についてだけみることになる。

15. believe が to 不定詞をとる場合

非状態動詞	状態動詞	完了形	進行形
out	ok	ok	ok
(12 a, 13 b, 14 b)	(12 b', (14 a))	(11 c, 12 c)	(11 b, 13 a)

Stockwell (1973 : 570) は、「行為でないもの」(non-action) のものをとるといい、Hudson (1970 : 209) は、おなじ主旨のことを「一般に「できごと」

よりは「状態」でなければならない」(must in general be a 'state' rather than an 'event') とのべている。

3.3 to 不定詞をとる場合の see と believe のふるまいの比較

まとめて表にしてみる。

16.		運動動詞	状態動詞	完了形	進行形
see	to なし不定詞	ok	out	out	out
	to 不定詞	out	ok	ok	ok
believe	to 不定詞	out	ok	ok	ok

ここからわかるとおり、to 不定詞をとる場合の see, believe のふるまいは完全に一致する。つまり、see, believe とともに、to 不定詞として、状態動詞は許容するが、非状態動詞はとらない。また、完了形、進行形の「相」もうけつける。ここでは、

17. see が to 不定詞をとる場合は、そのふるまいは believe の場合とおなじである、

ことが確かめられる。

4. believe の類語のふるまい

believe には、'think'、'suppose' の意味がある (Oxford Paperback Dic.) が、この think、suppose についても、上で見たように、そのふるまいを見てみよう。

4.1 think

18. a John thought the book *to belong* to Bill.
b John thought Bill *to be playing* the piano.
c John thought Bill *to have gone* into the room.
c' *John thought Bill *to go* into the room.

think は、go のような非状態動詞は許容せず、belong のような状態動詞を許容し、また have gone、be playing のような「完了形」、「進行形」を許容している。また、小西 (1985 : 1619) は、think について「状態を表すものに限られる」とのべている。

4.2 suppose

19. a He supposed me *to know* all about it.
b He supposed me *to have gone*.

suppose も think 同様のふるまいをしている。小西 (1985 : 1544-45) は、suppose について「状態動詞 (stative verb) あるいは完了不定詞や進行形の不定詞」をとるとしている。

4.3 consider

20. a Everyone considered the mistake *to be* very serious.

(小西 1985 : 294)

- b *Hortense considered Elmer *to sell* his last porcupine (today).

- c Hortense considered Elmer *to have sold* his last porcupine today.

(荒木 1997 : 163)

小西 (1985 : 295) で、「to be に代えて to do が用いられることもあるが、この場合は通例進行形、完了不定詞となる」としている。

4.4 understand

see は to 不定詞をとるときには 'understand' の意味をもつことができるが、understand のときのふるまいを見ることにしよう。

21. a He understood my silence *to be* a refusal.

- b I understand him *to be willing* to help.

- c I understand the message *to mean* they aren't coming.

小西 (1985 : 1672) は、understand について、'S understand O to be [to do]' の項目をもうけ、「この構文では to do は通例状態を表す動詞、完了形、進行形がくる」とのべている。

Swan (1995 : 610) では、believe、consider、feel、know、find、think、understand などの動詞について、'object + infinitive (usually *to be*)' としてあり、「状態動詞」'be' をとるとまとめてある。

5. まとめと残る問題

5.1 以上、具体的な例によって見てきたように、

- ① see は、to なし不定詞の場合は「できごと」・「行為」をあらわす非状態動詞をとり、また to 不定詞の場合は「完了」・「進行」の「状態」にかかわる状態動詞をとる。これらは、そのふるまいがまったく異なり、完全に「相補関係」にある。これは、「動き」が直接知覚の対象となり、そうではない、動きのない「状態」は認識の対象にしかねないからである。
- ② to 不定詞をとる場合の see は、believe、think、suppose などの思考動詞とふるまいが同じである。⁽³⁾

ということを見た。

5.2 残る問題

5.2.1 上で見てきたような、表題の問題に関しては「行為」、「状態」、「一時的」、「変化」などキーワードとしてかかわってきた。これらは、いずれも to なし不定詞と ing 形との関係につながると思われる。たとえば、

- 22. a I saw the girl *lying* on the bed.
b I saw the glasses *lying* on the bed.
- 23. a I saw the girl *lie* on the bed.
b *I saw the glasses *lie* on the bed.

(22 a, b) では ‘lying’ が「状態的な場面」(a static situation) を表し、許容されるが、(23 a, b) では ‘lie’ が「変化」(change) を表し、そのため、みづか

ら動けない 'glasses' のほうは許容されない。「状态的」(static)な解釈をこのving 形は「行為」の可能性をもたない (Kirsner 1977 : 172) のである。

24. a There is a bird *flying* in the sky.
a' * There is a bird *fly* in the sky.
b I caught him *stealing* the money.
b' * I caught him *steal* the money.
c I took a picture of the boy *meeting* the girl.
c' * I took a picture of the boy *meet* the girl.
d In this picture you can see Joan *blinking*.
d' * In this picture you can see John *blink*.

(24) の各文では to なし不定詞が許容されない。

25. a There are some boys *sick* in the hall.
a' * There are some boys *tall* in the hall.
b Have I ever shown these pictures of my grandfather *nude*?

(25) では sick、nude とともに「一時的」な状態をのべたもので、許容されない。

5.2.2 さらに興味ぶかいのは、Leech (1987 : 25) が、

26. a I could hear a door *slamming*.
b I heard a door *slam*.

について、(26 a) では「継続する、くりかえされた音」(a continuing and repeated noise) であるが、(26 b) では「ひとつの瞬間的な音響」(a single

mementary percussion) をあらわすとのべていることである。これは、まさしく「状態」と「行為」ないしは「相」にかかわっているからである。

最後に、興味ぶかい (27) の seem のふるまいに注目したい。

27. a *He seems to solve the problem.
b He seems to be solving the problem.
c He seems to have solved the problem.

松村 (1998 : 138)

(27 a) では「非状態動詞」solve が許容されていないが、(27 b, c) では「進行形」、「完了形」が許容されている。これは believe のふるまいとまったくおなじである。

これら事実とは本稿の内容となんらかの関係をもつと考えられるが、これをふくめての説明はこれからの研究課題である。

註

(1)これとおなじ文を (Felser 1999 : 42) では

- i I saw John *own* a house for two minutes once.

として許容している。

(2)このことを Felser (1999 : 45) では、つぎのような規則だてをされている。

The SLP Constraint

For a direct perception interpretation to be available, the bare infinitive complement of a perception verb must contain a stage-level predicate.

(3) see などの知覚動詞、believe などの認識動詞(「私的動詞」)は、「過去の一回限りの行為」にはつかわれることがない 'could' についても、共通に許容されるという、きわめて興味ぶかい事実がある。

i When we went into the house, we could *smell* burning.

ii I could *understand* why he had decided to retire at 50.

(柏野 2002 : 39)

参考文献

Akmajian, A.A. 1977. 'The complement structure of perception verbs in an autonomous syntax framework' in Culicover et al. *Formal Syntax* Academic Press

荒木一雄 (編) 1997. 『新英文法用例辞典』 研究社

Bolinger, D. 1974. 'Concept and percept': Two infinitive constructions and their vicissitude' *World Papers in Phonetics Festschrift for Dr. Onishi's Kiju* 65-91

Bolinger, D. 1975. *Aspects of Language* Harcourt

Felser, C. 1998. 'Perception and control: a Minimalist analysis of English direct complements' *J. Linguistics* 34: 351-385

Felser, C. 1999. *Verbal Comlement Clauses* John Benjamin Pub. Company

Hudson, R.A. 1971. *English Complex Sentences* Amsterdam North-Holland

葛西清蔵 2000. 「知覚動詞の受動態」『言語と文化』札幌大学外国語学部紀要 53 : 17-35

柏野健次 2002. 『英語助動詞の語法』 研究社

Kirsner, R. 1977. 'On the passive of sensory verb complement sentence' LI 8: 173-179

Kirsner, R./S. Thompson. 1976. 'The role of pragmatic inference in seman-

- tics: a study of sensory verb complements in English’ *Glossa* 10: 200-240
- 安井編 (1978) 『海外英語学論叢』 英潮社145-190
- 小西友七 1985. 『英語基本動詞辞典』 研究社出版
- Lapointe, S.G. 1980. ‘A note on Akmajian, Steel and Wasow’s treatment of certain verb complement types’ *LI* 11: 770-787
- Leech, G.N. 1987 *Meaning and the English Verb* (2nd edition) Longman
- 松村瑞子 1998. 『日英語の時制と相』 開文社出版
- Mittwoch, A. 1990. ‘On the distribution of bare infinitive complements in English’ *J. Linguistics* 26: 103-131
- 太田 朗 1980. 『否定の意味』 大修館
- Riddle, E. 1975. ‘Some pragmatic conditions on complementizer choice’ *CLS* 11: 467-474
- Stockwell, R.D. et al. 1973. *Major Syntactic Structures of English* Holt, Rinehart and Winston
- Swan, M. 1995. *Practical English Usage* (2nd edition) Oxford
- Wasow, T. 1977. ‘Transformation and the lexicon’ Culicover et al. (eds.) *Formal Syntax* Academic Press